

木村和世著

『路地裏の社会史』

大阪毎日新聞記者 村嶋歸之の軌跡』

評者・梅田 俊英

本書は、ジャーナリストであり、労働運動指導者でもあった村嶋歸之^{むらしまよりゆき}（1891-1965）を中心にして、久留弘三・賀川豊彦らの動向を扱った評伝である。村嶋といえば、最初のサボタージュ闘争の提起者として一部の研究者には知られた存在だった。まず1919年の川崎造船所争議でのサボタージュ闘争についての村嶋の手記を記載したのは『兵庫県労働運動史』（1961年）である。その後、友愛会の労働組合化を促した闘争として、村嶋の提起したサボタージュが「画期的」なものだったと高く評価された（池田信『日本機械工組合成立史論』日本評論社、1970年、138頁）。

ほかに、村嶋が総同盟の内紛に際して調停者として活躍したということなどが社会労働運動史の通史には必ず引用されることである。ところが、村嶋自体の伝記研究はながらく手薄なものであった。そこにあって、最近になって『村嶋歸之著作選集』（全5巻、柏書房、2004-05年。なお、第3巻「労働者の生活と「サボタージュ」」には木村氏が解題を執筆されている。）が刊行された。こういう動向の中において、本書『路地裏の社会史』が出版されたのである。本書「あとがき」によると、著者が関西大学大学院在籍中、小山仁示から村嶋の研究を勧められた

とある。こうして著者は1985年に村嶋の遺族に面会し、彼についての研究を長らく続けることとなった。その研究の集大成が本書といえよう。20年余をかけた労作なのである。これまで、断片的にしかわからなかった村嶋の生涯を明らかにしたという点で本書をまず評価したい。つづいて、本書の構成を紹介しよう。

第1部 大阪毎日新聞記者 村嶋歸之

第1章 路地裏からのレポート

第2章 大阪小市民の源流

第3章 労農記者として

第4章 労働運動の発展

第5章 労働運動と『大阪毎日』の報道

第2部 盟友 久留弘三と村嶋

第6章 久留弘三と関西の労働運動

第7章 三菱・川崎造船所争議

第8章 賀川をめぐる動き

第9章 久留弘三の総同盟脱退

第10章 総同盟分裂の序章

第3部 ジャーナリストをこえて

第11章 二つの潮流の対立

第4部 路地裏に行く

第12章 盛り場からのルポルタージュ

第13章 新聞と社会事業

第14章 新しい出発

以上のように、本書はジャーナリストとしての側面、労働運動リーダーとしての側面、社会事業家としての側面的のように、村嶋について多面的にあつかったものである。第1部では村嶋のジャーナリストとしての出発と、大阪の路地裏での民衆の姿が描かれる。村嶋は若くして日露講和条約反対の国民大会が開かれる情勢の中で新聞記者を志すようになったという。そして、早稲田大学政経学部に入学する。こうして、1915年には大阪毎日新聞社に入社し、労農記者として活躍することになった。このころは、友

愛会の発展期になっていて、彼もその運動に大きく影響を受けたし、運動の発展にも寄与した。

本書では、村嶋の著作物だけでなく多くの原史料にあたっており、従来知り得なかった村嶋像に接することができる。村嶋は、「人間に対する共感と愛情」（7頁）でもって民衆の生活を描き続けた。そのベースには旺盛な「正義感」（22頁）があったという。本書を通読すると確かに彼はそのような人物であったと実感できるが、もう一つ彼がそのような人生に入ろうとするきっかけがなにであったか、具体的にはわかりにくい。当時の青年は、さまざまな著作や友人や教師からの影響などによって人生を選択したものであろうが、村嶋はどういう信念で労働運動などに関係しようとしたのかをもっと知りたいと思った。

彼が青年記者の時ロシア革命が起こる。本書において「ロシア革命の余波」として「ロシア革命のもつ強い影響力が、都会だけでなく、日本の一地方にまで波及」（96頁）していたとされる。こうして『労働及産業』の「おい、小僧供、心配するな、お前たちでも天下は取れるのだ！総理大臣にもなれるのだ！」という記事が引用されている。ところが、この記事は同誌編集部の「作為」であったことが明らかになっている。戦後しばらくはこの史料でもってロシア革命の影響の強さが強調されたものである。ところが1971年には同誌編集長だった野坂参三によって同文は出版部員の平沢計七の作文であることが明かされた。また、野坂も同誌に別名で記載したという（この経緯については神田文人「日本社会主義運動史研究の軌跡」『歴史科学大系26 社会主義運動史』校倉書房、1978年 が詳しい。）。同史料でもってロシア革命の影響が日本の一地方にまで及んでいたという根拠にはなり得ない。やはり、山川均などの一部の社会主義者をのぞいて、それほど影響が強かったも

のではなかったといえよう。いずれにしても、村嶋がどのような思想の影響を受けたのかはこれからの研究課題であろう。

第2部では、久留と労働運動との関わりが主題となる。彼についてもこれまでの研究では詳しくなく、遺族からの聞き取りなどによる本書はその点でも貴重である。久留の場合には、早稲田大学での安部磯雄の講義が「社会問題に興味を持った」（134頁）きっかけである。このように、安部のような明治社会主義者が大正期の人々に影響を与えた例は各地にある。久留の社会運動への接近はそういった例のうちに属すと言えよう。こういうなかで、久留はさっそく友愛会に加入した。これ以後、友愛会の幹部となり、労働運動を指導するわけである。また、第2部では村嶋についても多くの言及があり、彼が賀川を通してキリスト教に接近した事情がわかる。1924年彼は賀川から受洗してキリスト者となった。とはいえ、第3部からわかるように1925年前後の総同盟の内紛・評議会の成立という労働運動の動向の中で、彼は一貫して分裂反対の立場で活動が続けたのである。このころになると村嶋の社内での立場が「微妙なもの」（224頁）になったという。その根拠として協調会大阪支部長の報告の内容が挙げられている。協調会は村嶋をはっきりと労働運動指導者としてとらえていたという。たしかにそうであろうが、実際に社内でのどのような圧力・圧迫があったか知りたいところである。

第4部では、村嶋のルポルタージュの活動、社会事業とのかかわり、及び新聞社を退職した後の動向、そして、1955年からは「一步もベッドからおりられない」（307頁）生活から1965年、73歳で亡くなるまでが記述されている。にもかかわらず最期まで「社会に向かって発信」（309頁）し続けたという。

ところで、村嶋歸之は大阪毎日新聞記者であった。1937年、47歳で病氣退職するまで、20年余にわたって職業的新聞人だったのである。そのことと、労働運動の指導者との関わりについて若干考えよう。一定の時期、「労農記者として記事を書きつづけた村嶋ではなく、労働運動活動家の一人として、ひたむきに労働者とむきあっている村嶋の姿があった」(167頁)のである。村嶋が新聞記者となった大正初期は日本の新聞の歴史で大きな転換点を迎えていた。

明治期の新聞は多く「政論新聞」としてスタートした。ところが、「新聞紙条例」などによる政府の弾圧の中で「大新聞」は「不偏不党」の報道新聞に徐々に変質していったのである。「大阪毎日新聞」は大正期には「東京日々新聞」と合併し100万部を超す「不偏不党」の全国新聞となっていった。しかし、この時期には過去の政論新聞の論調の残滓は色濃くのこっていたといえる。当時の新聞は大正デモクラシー下であって、憲政擁護運動を支持し民本主義の論調を掲げていたのである。

大正期の新聞の転機は1918年の「大阪朝日新聞」での「白虹事件」である。この事件の結果、同新聞から長谷川如是閑・大山郁夫らが退社する。これ以後、新聞はよりいっそう「不偏不党」にならざるをえなかったであろう。しかし、記者レベルではなお言論の場として存在し得たのである。また、地方新聞のレベルになるとまだまだ、言論人が活躍していたと言える。「新愛知」「信濃毎日」の桐生悠々、「名古屋新聞」の小林橋川ほか、枚挙にいとまがない。村嶋が記者と同時に労働運動指導者としてあり得たのも、そのような状況にあったからではないだろうか。

木村氏が「村嶋は単に労働運動の指導者の一人であったわけではない」(312頁)と言われるのには少し異論がある。たしかに彼は旺盛に「人生の報告者」としてルポルタージュを公表

しているわけであるが、これは彼にとって二者択一のものではなく、ルボも労働運動ないし民衆運動と同一のものと理解していたように思う。その例として、本書で取り上げられている場合を見たい。野田律太らの「野武士組」の影響下で「女給同盟」が結成されるが(268頁)、村嶋はそれにびったりと寄り添い、ルボを書き、講演もするのである。

一部問題点も感じたが、全体として本書から著者の村嶋研究にける情熱が伝わってきて、最後まで一気に読み通すことができた。我々協調会研究会の刊行した復刻版を多用して当時の労働運動の状況が記述されている。そのため非常に詳しい叙述となっている。それはよいが、これまでの労働運動通史(たとえば、大河内一男・松尾洋『労働組合物語 大正編』筑摩書房、1965年)なども参照したかったところである。そのためであろうか、二三、初歩的なミスが目についた。たとえば、米騒動の発生が1917年(288頁)となっていること、山川菊栄が「山川菊枝」、杉山元治郎が「杉山元次郎」(これは本文も索引もそうになっている)と誤記されていることなどである。

とはいえ、これらはほんの些細なもので、著者の研究は大変深いものといえる。それは「村嶋歸之書誌年表」や「注釈」を見れば、明らかなことである。日本労働運動史研究は最近はあまり盛んとは言えない。その中で、本書が正面から労働運動リーダーの動向をとらえ、三菱・川崎造船所の大争議などを明らかにしたのは好感が持てた。池田前掲書のほか、従来の運動史研究などには名著が存在する。それらを取り入れて、さらなる研究の深化を望みたい。

(木村和世著『路地裏の社会史－大阪毎日新聞記者 村嶋歸之の軌跡』昭和堂、2007年6月刊、341頁+xviii頁、定価3000円+税)

(うめだ・としひで 大原社会問題研究所兼任研究員)